

2. 全体討論会の報告

企画の意図

土木学会全国大会の全体討論会では、仙台大会・熊本大会において自省・外部批判を討論会テーマに位置付けてきた。札幌大会では、「21世紀のクオリティ・オブ・ライフをめざして」をテーマに、「モノの豊かさから心の豊かさ」へという大転換を実現するためのひとつの方法として、土木技術は「環境の豊かさ」の形成をとおして貢献できることを提案したいと考えて企画した。

討論会の内容骨子

全体討論会の詳細は、土木学会誌 11月号（土木学会誌学生編集委員：吉村美保・岩本直樹編）を参照されたい。ここでは、討論された内容の要点を、「心の豊かさを享受できる環境づくり」と「産官学を挙げた土木技術者づくりと、国民への発信」の視点からまとめる。

「心の豊かさを享受できる環境づくり」

わが国は明治維新以来、ヨーロッパ的な所有の論理によって社会を再構築してきた。しかし、モノの所有ということが、いま時代の転換のなかで問われている。モノをたくさんもったほうがいいという幸福感のなかにあった戦後世代とは異なって、若者を中心に、モノの所有を放棄しても、心の豊かさを得ようとする人が多い。

「モノの豊かさから心の豊かさ」へという大転換をどのように実行するかは、難しい問題である。この移行を実現するためのひとつの方法として、土木技術は「**環境の豊かさ**」の形成をとおして貢献できる。安全で、快適で、美しく、安心できる環境は、決して画一的なものではなく、環境と人間の関係は複雑で多様なものである。土木技術をとおして、道路や河川、都市施設などを造ることは、環境を再編することであり、モノや人びとの配置を変えることであり、環境の履歴を抹消したり書き換えたりすることであり、ひいては、そこに暮らす人びとの配置や履歴を変えることである。このため、環境を再編する技術者には、構造物を造る技術のみならず、環境の履歴を書き換えることの責任の重さを知らなければならない（仙台宣言）。このことは、土木工学が、社会科学や自然科学とのかかわりの深い総合工学といわれる理由である。

「産官学を挙げた土木技術者づくりと、国民への発信」

IT革命によって我々は、大量の情報を手に入れることができるようになった。しかし、このことは、ものごとについてきちんと知ることを可能にする一方で、誤った判断のもととなる。情報はいいかげんであり、あいまいさに満ちている。だからこそ、我々は、洪水のような情報のなかから、どれが信頼するに足る情報であるかを判断できなければならない。この判断を助けるのが「知識」であり、まず、土木技術者自らの知識の改革から始

めなくてはならない。

これまでの総合建設業・コンサル・官公庁・大学における土木技術者は、知識を普遍的なものと考えて、教える人間に知識が備わっていれば、学ぶ者にそれを手渡すことは簡単だろうと考えていた。これは、大きな誤りである。知識とは、実は個人のなかであり、特定の状況の中でその力を発揮するものである。構造物を造る技術はもとより、地域住民や国民へ説明する技術が「使えるものになる知識」となるためには、教える者と教えられる者との相互作用のなかで、具体的な実地訓練（OJT）をとおした知識の伝達が必要である。

特に、「もの言わぬ土木技術者」とまで揶揄される我々が、心の豊かさを享受できる環境づくりの技術者として、新たな時代の要請に即応できるためには、個々人のコミュニケーション能力を養成することが必至である。このことによって初めて、我々がこれから成すべき「環境の豊かさ」を形成する技術の向上について、国民からの信用と信頼がもたらされるのではなからうか。

評価改め、舞台裏

仙台大会・熊本大会における全体討論会を踏まえ、札幌大会の「土木学会の未来を語る」企画の苦心点は、参加者の頭の切り替えにあった。そのため、「北海道 土木の風景 - 自然環境共生インフラ - 」というスライド上映を取り入れた。この作成を担当した北海道開発局の高橋渡氏こそが、今回の功労者であろう。頭の切り替えが成功したか否かはともかく、このスライドショーの評判はすこぶるよかった。

そして、今回の企画を成功に結び付けてくれた人は、パネリスト星野知子さんである。「パネリスト席にTVモニターを置いて、フロアとパネリストが一体になれるか?」「土木学会は、このようなセンスのない学会ですか?」との問いに、我々裏方は、驚きとともに即断を迫られた。しかし、会場の空気は、この一言で、激変したのである。間違いなく、参加者がパネリストと一体になった。

会場に入りきれないくらいお集まり頂いた参加者の皆様、星野さまをはじめとするパネリストの方々、そしてコーディネーターを勤めた佐伯先生に、謹んで感謝申し上げます。しだいである。

（特別講演会・討論会副部長 田村亨）